

- カナダにおける語学教育の現場視察 -

1、カナダについて

カナダは、歴史的背景から、英語と仏語を公用語に持つ。とはいえ国土のほとんどで英語が主流となり、フランス語がきちんと通じるのは、首都オタワと、独立運動が絶えないことで有名なケベック州、そして、英語圏とみなしている町の一部に、フランス人がまとまって植民した地域のみ。これが、公用語を二つ持つ国の現状である。

首都オタワとカナダの最大都市トロントがあり、ケベック州の隣に位置するオンタリオ州の学校では、当然フランス語は必修科目。家庭内では英語で育てられているカナダの子ども達が、どのようにフランス語を学び、学校の教諭はどのように教えようとしているのか。書籍やインターネットの検索では見えてこない実情を知るべく、現在のカナダの語学教育現場を視察した。

2、学校選び、4つの選択肢

子どもが就学年齢に達すると、保護者には、4つの選択肢が与えられる。いずれも自宅近くであることが条件だが、まずは、公立校か、カトリック系の学校かを選び、それぞれに、英語教育校（フランス語圏ではフランス語教育校）と、イマージョン（漬け込み型バイリンガル教育校）という選択肢がある。各家庭の教育方針や、将来のビジョンをもとに、学校を選ぶことになるが、入学後、何らかの問題が生じた場合は、別の学校へ転校も可能。

3、英語圏でのフランス語の位置づけ

オンタリオ州は、タイムゾーンは一つだが南北に広く、気候は変化に富む。川向こうにアメリカ・デトロイトを望む国境の街ウィンザー市と、政府関係者が多く住み、移民も多い首都オタワの公立校を視察先に選んだ。ウィンザー市は、アメリカ寄りという地理的要素もあり、語学教育より、むしろスポーツや文化活動に熱心に取り組む家庭が多いと聞いた。他方、オンタリオ州北部のオタワでは、英語とフランス語が日常的に混在しており、カフェでもマーケットでも、英語、仏語の両方が通じる。また、政府関係の仕事に就くには、英・仏語に堪能であることが必須条件のため、両親のバイリンガル率も高く、語学教育に熱を入れる家庭が多いようだった。今回の視察では、エレメンタリースクール（日本で言う幼稚園・小学校・中学校を含む、5～13歳の子どもが通う学校）を訪れた。

4、カナダの教諭たち

ウィンザー市、オタワ市とも、オンタリオ州の教育委員会に属するため、教育の基本的な部分に相違はなかった。日本と比べて驚いたのは、教諭は教育委員会に雇われるのだが、同じ学校に勤務し続け、異動がないことである。管理職である学校長に多くの権限が与えられ、特色ある学校づくりが行われている。教諭になるには、大学卒業後、教諭養成コースに入学し直し、一年間授業を受けつつ、長期間の教育実習をこなして、やっと免許状を手にする。その後、代替講師として教育委員会のリストに登録され、常勤講師が、一日病休したり、数ヶ月に渡り産休を取ったりする度、学校から連絡を受け、代替にあたる。働きぶりを校長が評価していて、後にその学校に教諭の欠員が出ると、校長が推薦状を出し、教育委員会が認めて、漸く常勤の教諭職を得るのである。現場で経験を積み、上司に推薦されて初めて常勤雇用となるところが、日本における採用方式との大きな相違点である。

5、語学教育の現場

オンタリオ州では、教科書は学校の持ち物で、個人に支給されない。学校から貸出してもらい、生徒はそれを丁寧に扱うよう指導を受ける。フランス語の教科書も同様だった。教科書は、長年同じものを使っていると説明を受けたが、絵や表を多用しており、色使いも良く生徒の目を引く。附属のテープやCDといったオーディオ教材も活用しやすいよう工夫されていた。また、教科書を自宅に持ち帰れないクラスでは、多数のプリントを用意し、専用バインダーに纏めていくよう指導されていた。教諭も自分自身の発音や会話の間のとり方、リピートのさせ方など、個人的に研究し、自己研鑽に励んでおり、「話す、聞く」力を徹底して養おうという姿勢が見て取れた。新学期に入ったばかりだったので、テキストの使い方、表の見方等、細かい説明もあり、指導が行き届いている印象を受けた。

英語教育校での、フランス語教育について。

(ウインザー市 A.V. グラハム校 GRADE 5 マリー・ソラシ先生)

フランス語を習い始めて2年目を迎える10歳クラスを視察。「ピザ」がテーマの教科書に従って、ピザの具を示す絵カード、スペルカードを活用。まずはリピートを促し、単語を定着させるレッスン。復習として、その具材が好きか嫌いかという簡単なQ & Aも。身近なテーマということもあり、生徒は発言に積極的だった。次に教科書附属のオーディオ教材(CD)を活用。まずは、「ピザの歌」を合唱。発音や表現の練習にもなっている。その後、ピザ屋の店主がラジオコマーシャルで、店のメニューを紹介するという設定の音声を流す。生徒は、店主の紹介したメニューがどれか、プリントの絵から選んで答えるエクササイズに挑戦。これにも生徒は熱心に取り組んでいた。

一見、遊びのような教材だが、生活の中にあるものを、フランス語で表現し、実際に使ってみることで、定着度を上げる、という狙いどおりのレッスンが展開されていた。

(ウインザー市 A.V. グラハム校 GRADE 7 マリー・ジョエル先生)

フランス語を習い始めて、4年目、12歳のクラスを視察。フランス語の難関である、動詞の活用を学習し始めたところだった。教科書も、各章でテーマにそった長い文章を読み、理解し、自分の意見をまとめる、という比較的高度な内容。新しく手渡された教科書について、各ページの役割や使い方の説明があり、その後、ノートの作り方にいたるまで細かい指導があった。一番印象に残ったのは、品詞ごとに新出単語を整理して、辞書を引き、ノートに記入するルール。フランス語は特に、品詞を分類することなしに単語を理解したり、暗記したりしにくいいため、ベテランのマリー先生の指導は、適切だと感じた。また、少し広めのポストイットを用いて、基本動詞の活用を書き出し、ノートに貼り付けておいては?といった細かいアドバイスは、今後、暗記しなければならない単語数が増えることを考えると、生徒にとって非常に有効である。(その他、マグネットの効果的な使い方など、クラス終了後にも、個人的にレッスン法についてのアドバイスを下さった。)

(感想)この学校で強く感じたのは、先生方のレッスン準備の素晴らしさ。

「レッスンが始まる前に、その成果は決まっている」と言いたげなほど、彼女達の休憩時間は周到なレッスン準備に当てられていた。同じ教科書を長年教えられる、というのも、指導法をさらに磨く上で、役立っていると話していた。「同じ内容のレッスンを何度も繰り返すほど、より効果的に教えられるようになる」という先生方に、親しみと共感を覚えた。

イマージョンでのフランス語教育について

イマージョンでは、「フランス語レッスン」はもちろん、「フランス語で別の教科を習う」時間もある。漬け込み型とは、英語で育ってきた子ども達を、フランス語の中に漬け込んで、自然と語学を習得させよう、という学校のシステムそのものを指す。

(オタワ市 バハーヴェン校 GRADE 5 ミシェル・カシミール先生)

朝8時15分に学校へ到着。どの学校も同じだが、まず玄関近くの事務室へ行き、ビジターとして記帳。ビジターバッジを身につけ、教室へ。この日は10歳クラスの担任、ミシェル先生が登校指導に当たる日だったので、校庭に出て子ども達を元気に迎える。ほとんどの子が保護者に連れられて登校してくる。

その後、学年初めの全校朝礼があると聞き、体育室へ。朝礼の日には、スクールカラーである「青」を身に着けてくるようにとの指導があったらしく、多くの生徒が青いTシャツを着たり、青いリボンを結んだりしていた。集まった中で一番小さい子は、幼稚園生。集合や教室移動は、すべてフランス語で指導。徹底している上、子ども達もすんなり理解している。朝礼での校長先生のスピーチは英語だった。

ミシェル先生のクラスには、英語担当の先生もいて、午前中はフランス語、午後は英語で授業を受けると聞いた。私にも教室到着後すぐに、30分ほど時間を下さったので、まず日本の学校について話し、その後、子ども達からの質問に答えた。午前中だったので、このやりとりもすべてフランス語で行った。

じっくり見学させてもらったのは、フランス語で習う「社会」の時間。実在する政党について学んだ後(社会科)、政党のポスターを作る(アート)、政党のスローガンを作る(国語)、政党のリーダーの名前を調べる(情報処理)、ポスターを見せながらの説明(プレゼンテーション)といった、様々な課題が出された。「社会」の時間ではあるが、様々な他教科の要素が取り入れられた、非常に興味をそそるレッスンだった。説明はすべてフランス語でなされたが、子ども達の理解が十分でないとは判断した場合は、すぐに英語で、よりわかりやすく説明し、すぐにフランス語での指導に戻った。その言語切り替えの見事さ、フランス語に固執しない柔軟さが、習得度の高いバイリンガル教育を支えているのではないかと感じた。

子ども達も、フランス語を、特別なものや別の言語と意識せず、学校の中で自然に親しんでいるように見えた。決して習得の容易な言語ではないのに、上手に使いこなし、生徒間でも、きちんとフランス語でやりとりしている姿は素晴らしかった。

ただ、机間指導をしてみると、話せても正確にスペルが書けない(フランス語表記の難しさのせいでもあるが)生徒が多く、10歳クラスは、おそらく「話す」力を「書く」力へと伸ばしていく、その移行期に当たるのだろうと思った。

(感想)イマージョンは、バイリンガル教育に関心の高い保護者が選ぶという意味でも教育環境が整っていて、保護者の理解、協力が得やすい、教師も教えやすい、理想的な学校である。だが一方で、学習速度のやや遅い子どもにとっては、2言語を同時に習得し、2言語を使って他の教科も学習していく、というのは困難で、どちらも中途半端になりやすいため、転校していくケースもあると聞いた。結局は、すべての子どもに良いという学習法や教授法はなく、子ども達と保護者、教諭が一体となって、一人一人の生徒に合った学校や指導法を見出していくことが、必要なのだと思う。

6、今後のレッスン改善について

カナダの学校視察での一番の収穫は、教育熱心な教諭たちに出会えたことだった。彼女達のアドバイスに従い、少しずつ私の教室での英語指導も改善していきたいと思う。既に文中で触れた事項も多いが、最後に具体的な改善点を挙げておく。

[改善点]

- ・生徒たちに身近なテーマに基づく教材作り
- ・更なるオーディオ教材の活用
- ・教材の意図、活用法についての説明
- ・ノート作りの丁寧な指導
- ・より綿密なレッスン計画、準備
- ・アートなど、英語を使った遊びの提案
- ・発表など、プレゼン力を磨く機会の提供
- ・英文法等について日本語でのわかりやすい説明
- ・書く力をつけるための取り組み
- ・保護者との連携強化

プライバシーの保護や犯罪防止のため、校内での写真撮影許可が下りにくく、授業風景や、先生の顔写真など、レポートを裏付ける写真が少ないのは残念である。しかしながら、今回の現場視察で得た情報を活かし、我が家の教室内に限らず、大分の子ども達に、もっと英語を身近に感じてもらう機会を提供できるよう、積極的に取り組んでいきたい。

《プロフィール》

池田（マックマレン）裕佳子

西南学院大学外国語学科フランス語専攻卒業。フランス留学後、別府大学にて英語音声学、英語指導法、英文学（シェイクスピア解釈）等を科目履修。医薬翻訳講座を受講中。

資格：フランス語科教諭免状（中・高） 英語科教諭免状（高） TOEIC 945

大分国際車イスマラソン 仏語・英語通訳ボランティア denk-pause 専属通訳

現在、大分市舞鶴町の自宅にて、予約制英会話教室 English @ Home を主宰。

初めて英語に出会う子どもから、受験生、海外留学後の大人まで幅広い年代の生徒を指導。

夫の出身国であるカナダの教育に興味を持ち、様々な教材や独自の指導法を研究中。

